

# 中・近世の城へ その原点

「前九年合戦時期の中心的建物」をテーマに、今年2月に開催された17(平成29)年度国指定史跡鳥海柵跡シンポジウム。同柵の全盛期で前九年合戦時期(11世紀中ごろ)の中心的建物と想定される原添下区域の建物跡2棟について、城郭考古学の第一人者である千田嘉博奈良大教授らを迎えて議論を深めたシンポジウムの様子を紹介する。原則、土曜日掲載。(菊池藍)

鳥海柵では、既に意義を述べてきたように、縦街道南区域、鳥海区域、原添下区域で規模の大きな四面廂建物を見つけています。原添下区域について教えていただいていたのは、四面廂建物の横にもう一つの建物が建っていて、その周りを堀で囲んでいたこと。鎌倉時代以降の中世に各地で造られていった館の原型が、鳥海柵にあったのです。堀に沿って、櫓台の柱穴がありました。堀には身分の指標など多様な機能がありました。堀と櫓がセットになっている。鳥海柵が戦いに備えた「城」であったことを、

考古学的に証明する重要な発見です。中世・近世

の日本の城がどのように発達していったのか、その原点が鳥海柵で分かるのです。将来、櫓や柵を復元できれば、全国の城ファンが注目するのは間違いないですね。

一般的に城のイメージは、本丸がしっかり守られていて、その外に二の丸、三の丸があったと考えます。ところが鳥海柵はそれぞれ守りを施した「城館」が分立的にありました。江戸時代の城とは違う、鳥海柵の歴史的特性も発掘調査が解明しつつあるのです。こうした点にも注目したいと思います。

(つづく)

千田 嘉博 (せんだ・よしひろ)  
奈良大学文学部文化財学科教授。1963年、愛知県生まれ。奈良大学文学部文化財学科を卒業後、名古屋市見晴台考古資料館学芸員、国立歴史民俗博物館助教授を経て現職。

## 金分崎の国指定史跡 鳥海柵跡

1

## 考察 全盛期の中心的建物

2017年度シンポジウムより

講演 千田 嘉博氏 (奈良大学教授)

### 「前九年合戦と鳥海柵」 I



城郭としての鳥海柵について解説する千田嘉博教授